

1 ディベート教育

— 4技能の総合的強化と批判的思考能力の育成 —

高度情報社会・グローバル社会で活躍でき、仕事で英語が使えるレベルのコミュニケーション能力を育成したいという学生に対してディベートを授業に取り入れることは有効な手段となる。ディベート学習は、英語4技能の総合的強化と批判的・論理的思考力や説得のためのコミュニケーション能力の育成を目的とするからである。

4技能 (four skills) は、音声や表現力を重視した発信型のコミュニケーション活動によって総合的に強化される。ディベートは試合の時だけに4技能が統合された活動となるものではなく、準備段階からすでに様々な学習項目が含まれている。各技能の指導の際に重視すべきポイントは、リーディング活動においては目的を明確にして、情報を得るために、速くしかも正確に要点を捉るために読む。さらに意見や理由を鵜呑みにせずに、批判や評価する視点を持つ。ライティング活動では、パラグラフの構成を考え、主題文をはっきり表し、簡潔な文で論理的に明瞭に書く。スピーキング活動は自信を持って、明瞭に話す。重要な点は繰り返すなどして、聞き手を説得するために理解度を確認しながらコミュニケーションを図る。リスニング活動では、批判的精神を持ってスピーチの概要を理解したり、書き取ったりする。さらに重要な点をノートテーキングできるようになる、などである。

パフォーマンス指導は、ディベートの醍醐味である白熱した議論を聴衆の面前で展開させることが最大の目標となる。しかし人前に立つことを敬遠したがる学生に配慮し、正式なフォーマットに則った試合の前段階として次のような方法を取り入れることもできる。例えば、クラス内のスピーキング活動をライティング活動に替える。ディベートのテーマに関するリーディング用資料を与え、読後に自分の意見を書かせ、それをクラスメイトと交換して、さらに反論を書かせる。その意見を教師が吸い上げ、黒板上で議論を展開させるというのも一つの方法だろう。または、議論や反論のやり方を十分理解するために、はじめは日本語で話し合っても良いことにする。英語ができるだけ多く使わせたいならば、ディベートに特有の表現や語彙をあらかじめ提示し、しっかりと練習させておくと活動がスムーズに展開できる。

西部（2012）によると、ディベートを試合形式で行う場合は、2名以上の参加者からなる2チームが、与えられた命題に対して肯定側と否定側に分かれ、定められたルールの下で自らに有利になるような議論を展開し、相手チームではなく

第三者である聴衆やジャッジを説得する目的で行われる。どちらの側に立つかは試合直前にくじなどで決められる。試合までの準備段階では、自分個人の意見とは関係なく肯定側と否定側の議論を均等に複眼的にリサーチ・準備をすることが求められる。例えば、「日本は原子力発電所を廃止せよ」という命題に対しては、現状の原子力発電に関する政策の問題点を挙げ、廃止することによって生じる利益を提示できるようにしておくと同時に、廃止後に予想される不利益も説明できるよう準備をしておく。つまり自身の主張に対する正反対の主張をする最大の敵と試合前にシミュレーションをしておくことである。この方式は、ロールプレイでの学習活動を通じた、真理探求プロセスの一つの通過点として捉えられる。実社会における話し合いや会議では、自説を支持する証拠だけに関心が向けられやすく、その証拠はどこに弱さを含んでいるか気づかないことがあるが、この両方の立場を分析する形式は内省を促し、自身の弱点に気づき改善することにも繋がる。

英語圏の学校教育では、古くから**批判的思考（critical thinking）**の育成は望ましい教育目標と見なされ、スピーチ・コミュニケーション能力の育成と共に教育の中心に据えられている。批判的思考とは、感情的にならずに、判断に論理や証拠を重視する思考である。ディベートは証拠に基づいた議論を論理的に構築して提示する方法を取る点で批判的思考能力の育成に有効だと考えられる。近年の高度情報社会・グローバル社会においては、日本でも例外なく情報を吟味・選択する能力がますます重要になっているため、批判的思考能力の育成は教育において必要性が高まっている。だが、いまだオープンな意見交換や個性を発揮することに抵抗を示す学生や教師がいることも事実だ。知識の豊富さだけを主眼とせず、表現力や思考力をも豊かにする理想的な教育手段の一つであるディベートは避けることのできない活動である。

ディベートは英語学習であり、思考訓練である。日本特有の調和を強調して察しや忖度を殊更重んじる手法は国際社会の中では通用しない。物事の本質を見極め、自分の意見を持ち、独創的なアイデアや斬新な発想を生み出せる人材が何よりも大切な時代である。ディベートを学ぶことは、異文化と直接コミュニケーションができる高度な英語運用能力を備えた、知性ある学生へと成長することである。

（市島 清貴）